

2026(令和8)年上半期の わが国周辺の漁海況の特徴について

目 次

要約ー2026年上半期のポイント	1
1. わが国周辺の海況	4
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	7
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ・さば類・マアジ	11
(2)カツオ・ビンナガ	12
(3)スルメイカ・アカイカ	13
4. トビックス(マイワシの2026年の好不漁)	16

2026年8月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約－2026年上半期のポイント

● 総括

- ・2017年8月に始まった黒潮大蛇行が2025年4月に終息して約1年が過ぎ、日本周辺の海面水温が近年(2011～2020年)より低めとなった海域が見られた。
- ・全国主要港(108港)における2026年1～6月の水揚量は、前年比73%の62万トン、平均価格は前年比149%の326円/kgであった。近年同様に、水揚量が減少し価格が上昇した魚種が多く見られた。
- ・全魚種の水揚量減少の大部分は太平洋側のマイワシの不振によるものであった。一方、カツオは前年の不漁から好漁に転じた。

● わが国周辺の海況

- ・黒潮は2025年4月に大蛇行が終息してから約1年間はC型流路主体で推移したが、2026年4月にN型流路に移行した。
- ・海面水温は、冬季(1～3月)は太平洋と日本海共に北部を中心に近年(2011～2020年、以下同様)より低め海域もみられた。春季(4～5月)は、日本海は全域で高めであったが、太平洋は北部と南部共に低めの海域もみられた。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・JAFIC調査港における2026年1～6月の調査対象全魚種の累計水揚量は61万5千トン(速報値)で、前年同期比73%、過去5年平均比70%と、前年同期および過去5年平均を下回った。平均価格は326円/kgで、前年同期比149%、過去5年平均比159%と、前年同期および過去5年平均を大きく上回った。
- ・全魚種の水揚量減少の大部分は、マイワシの水揚量減少によるものであった。また、いわし類やさば類では、養殖向け餌料需要や国産魚への引き合いの強まりなどを背景に高値傾向が継続した。
- ・主要魚種について価格と水揚量の関係を前年同期と比較すると、水揚量が減少し、価格が上昇した魚種が多く見られた。
- ・個々の主要種における過去5年間の水揚量と価格の推移でも、水揚量の減少に伴い価格の上昇が見られた。

● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における本年6月末現在の水揚量は11.7万トン(太平洋側2.5万トン、東シナ海・日本海側9.2万トン)で、前年同期(31.6万トン)を約20万トン下回った。
- ・銚子港での1～6月の水揚量は1.6万トンで、前年を下回り、漁獲物も小型化した。道東ではまき網漁業の操業はなく、棒受網漁業でもマイワシは漁獲されなかった。
- ・日本海側では2～5月に隠岐海峡周辺での漁獲が好調で、境港の1～6月の水揚量は5.6万トンで、前年の4.8万トンを上回った。
- ・価格は過去4年を上回った。その要因として、例年主体となる太平洋側での著しい不漁などが挙げられる。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 11.8 万トン(太平洋側 1.9 万トン、東シナ海・日本海側 9.9 万トン)で、前年同期(12.0 万トン)並みであった。
- ・東シナ海・日本海側では対馬海域を中心に好漁であったが、太平洋側では 2022 年以來の不漁が続いた。
- ・価格は前年を上回り、1～6 月の価格も過去 5 年で最高であった。その要因として、国内の供給量の減少に加えて、ノルウェーなど北東大西洋のタイセイヨウサバの漁獲枠が削減されたことなど国際的な供給量の減少も挙げられる。

● マアジ

- ・マアジの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 2.8 万トン(太平洋側 0.3 万トン、東シナ海・日本海側 2.5 万トン)で、前年同期(3.1 万トン)並みであった。
- ・日本海側では山陰沖周辺で漁獲が続き、境港における 1～6 月の水揚量は前年を上回った。一方、東シナ海側の 1～6 月の水揚量は前年を下回った。
- ・価格は 3～4 月は前年を下回ったものの、他の月は上回った。

● カツオ

- ・竿釣りによる生鮮カツオの 1～6 月の水揚量は約 1.2 万トンで、過去 4 年平均(約 1.1 万トン)を上回った。
- ・漁場によりサイズが異なることから、生まれや回遊ルートが異なる複数の群れが日本近海に來遊している。
- ・現在來遊している小型のカツオが引き続き摂餌回遊を行い、秋季に戻り鰹となるまで東北海域で漁獲されると見込まれるため、好漁が継続し、JAFIC や水産資源研究所の予報を上回る可能性が高い。
- ・1～6 月の全国月平均価格は 390～571 円/kg で、前年より安い、近年ではやや高値で推移した。
- ・まき網による生鮮カツオの水揚量は 5 月まで低調だったが、6 月に急増した。
- ・まき網の 1～6 月の合計水揚量は 4,235 トンで、過去 4 年平均(約 2,900 トン)の 148%で好調に転じた。
- ・全国月平均価格は、5 月に 604 円/kg に上昇したが、6 月の好漁で 340 円/kg に落ち着いた。

● ビンナガ

- ・1～6 月の全国の生鮮ビンナガの水揚量は 6,168 トンで、過去 4 年平均(約 1.5 万トン)の 41%で、近年では最も低調だった。
- ・中型竿釣り船は 6 月下旬まで群れに遭遇しなかったが、6 月末に東北はるか東沖でまとまった群れが見つかり、例年より遅いビンナガ漁の開始となった。
- ・1～6 月の全国平均価格は 481～647 円/kg で、近年では高値で推移した。

● スルメイカ

- ・全国主要港における 1～6 月の生鮮スルメイカの水揚量は 2.0 千トンで、前年同期(2.4 千トン)、2022～2025 年平均(2.5 千トン)を下回った。この理由として、資源量変動に加えて、TAC に関係した採捕禁止や操業自粛が考えられる。
- ・全国主要港における 1～6 月の冷凍スルメイカの水揚量は 327 トンで前年(189 トン)を上回ったが、2022～2025 年平均並み(328 トン)であった。

- ・生鮮スルメイカの価格は、1 月は釣り主体に過去 5 年で最高価格となったが、2～6 月は底曳網やまき網が漁獲の主体で、小型サイズが大半であったことから低下した。冷凍スルメイカの価格は、水揚量が少なかったため高水準で推移した。

● アカイカ

- ・5 月中旬から北太平洋西経海域主体に大型いか釣り船 1 隻、中型いか釣り船 28 隻、サンマ棒受網兼業船(兼業船)1 隻がアカイカ操業を開始した。
- ・兼業船を除いて 7 月現在も操業中であり、漁獲量は JAFIC が意見交換会で漁期前に報告した予想範囲内で推移している。

1. 2026 年上半期の日本近海の海況

(1) 黒潮域

黒潮流路

- ・黒潮(図 1)は、1～3 月はおおむね C 型流路であったが、3 月下旬は B～A 型流路で推移し、4 月以降は N 型流路に移行した。
- ・九州～四国では 1～2 月は、黒潮流軸が接岸した。2～3 月には九州南東沖で小蛇行が発達し、4 月以降は小蛇行部の冷水渦が北上して九州東岸では徐々に離岸した。6 月には足摺岬沖でも離岸したが、7 月以降は冷水渦が縮小して接岸傾向になっている。
- ・潮岬では、黒潮流軸は期間を通して接岸した。
- ・伊豆諸島付近では、黒潮流路が1月に変動し始め、2～3 月には変動が拡大しながら黒潮続流域まで伝播した。この変動は 4 月に入ると縮小し、5～6 月は安定した N 型流路をとった。

海面水温

- ・九州～四国沖の海面水温(図 2-A、図 4-A)は、2 月下旬～5 月には小蛇行が発達して流軸が離岸すると共に冷水渦が発達したことにより、沿岸部では近年より低めの海域もみられたが、黒潮流軸周辺を中心に海面水温は近年より高めの海域が多く、近年並～近年より高めで推移した。6 月は、梅雨前線の停滞や台風の影響により、黒潮外側域を中心に近年より低めの海域が拡大した。
- ・熊野灘～遠州灘沖(東海沖)の海面水温(図 2-B、図 4-B)は、1～3 月には C 型流路の蛇行内側域の冷水渦の影響で、近年よりやや低めであった。4 月以降は、黒潮流軸が接岸し、近年より高めの海域が拡大した。6 月は梅雨前線の停滞や台風の影響で、近年より低めの海域もみられた。
- ・関東沖の海面水温(図 2-C、図 4-C)は、1～3 月には黒潮内側域の冷水渦の影響で、近年よりやや低めであった。4 月以降は、梅雨前線や台風通過の影響もあったが、黒潮流軸が接岸し、近年より高めで推移した。
- ・沖合の海面水温は、1～3 月には、関東南東沖～小笠原周辺(図 2-I)は近年より高め、沖縄東沖(図 2-J)や南鳥島周辺(図 2-K)は低めの期間が長かった。4～6 月の関東南東沖や沖縄東沖では、前線の停滞や台風通過の影響で、近年より低めであった。

(2) 親潮域・混合水域

黒潮続流

- ・黒潮続流(図 1)の最北上部(峰)は、期間を通して 37° N 前後であった。
- ・1～3 月の黒潮続流は、伊豆諸島付近で発生した変動が拡大しながら伝播して変動が大きかった。特に 2 月下旬～3 月上旬は変動が大きく、屈曲部が切り離されて暖水渦を生じた。

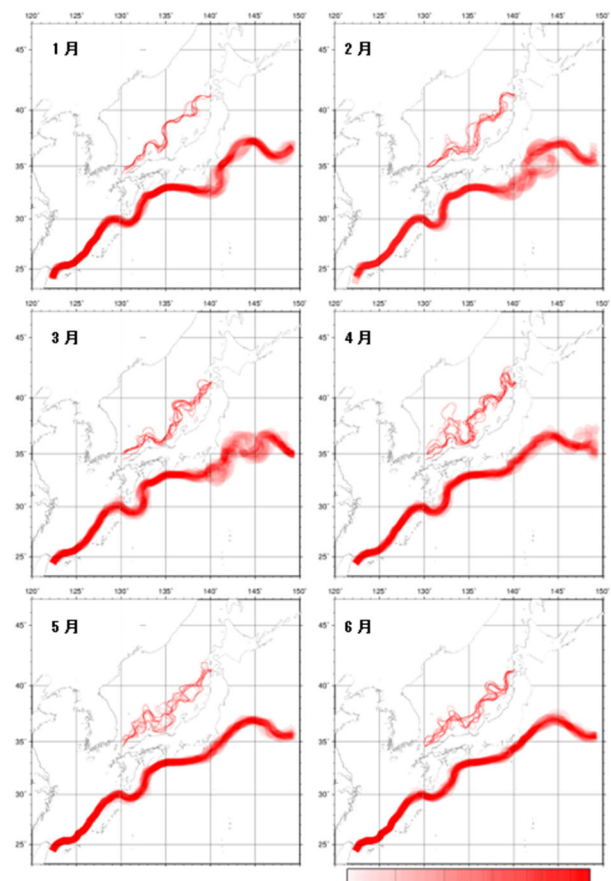


図 1.2026 年上半期の黒潮および対馬暖流の流路 出典:海上保安庁の海流 GIS 情報

- ・4～6 月はこの変動が収束し、流路は安定した。

親潮

- ・親潮の面積(100m深で 5°C以下)は、1～3 月は平年(1993～2017 年の平均)より小さめであったが、前年より大きめで推移した。第一分枝は沿岸寄りに分布した。
- ・4～6 月の親潮の面積は平年より小さく、前年よりやや小さめで推移し、第一分枝は沖合に移動した。

海面水温

- ・三陸沿岸の海面水温(図 2-D、図 4-D)は、1～3 月には近年より低め～近年並で推移した。2 月は親潮系水が沿岸寄りを南下した影響で、低めの期間が長かった。4～5 月は親潮が沖合を南下することが多く、暖水渦が接岸して、近年並で推移したが、6 月は黒潮続流域から暖水が沿岸寄りを北上して、近年より高めであった。
- ・三陸沖の海面水温(図 2-E、図 4-E)は、1～2 月には暖水渦や暖水波及の影響で近年より高めで推移した。3～4 月は親潮第一分枝が沖合を南下した影響で、近年より低めで推移した。5 月以降は黒潮続流域から暖水が波及し、近年並で推移した。

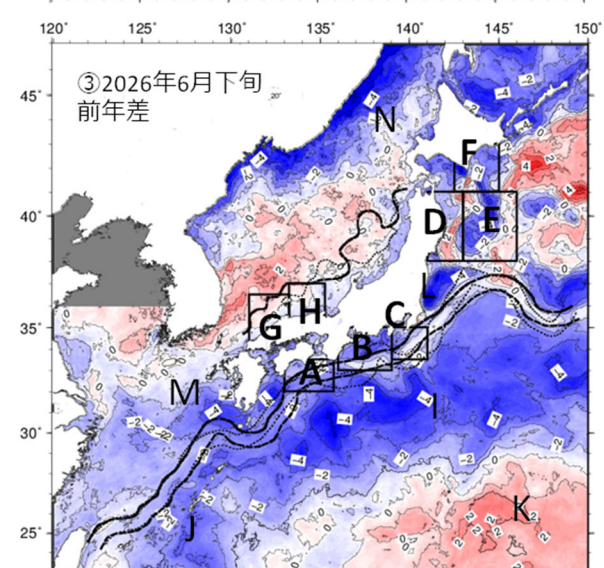
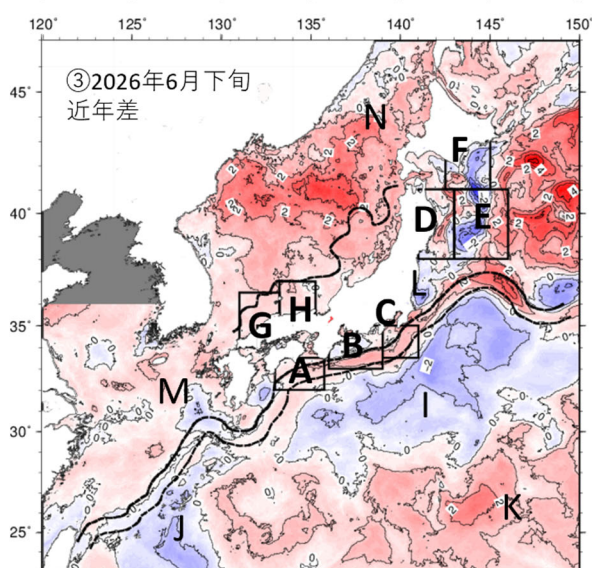
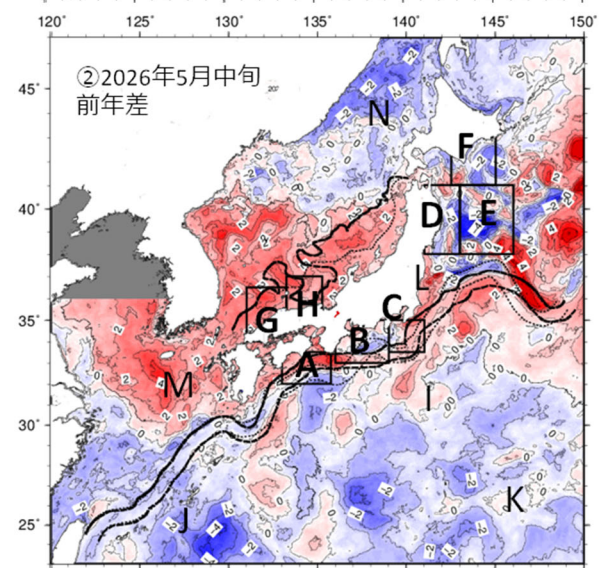
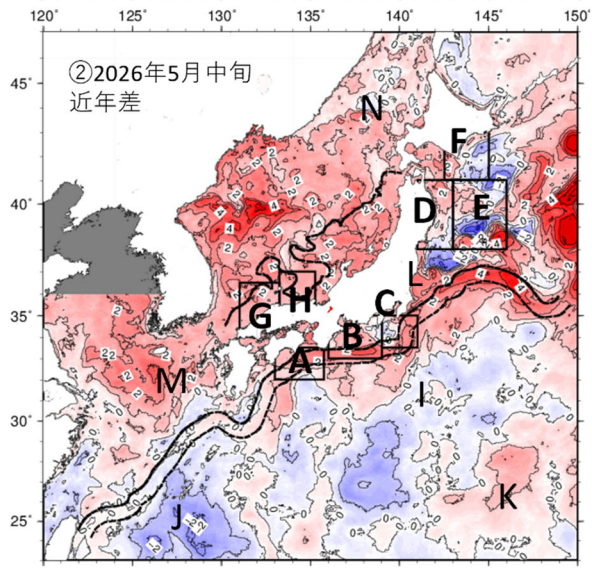
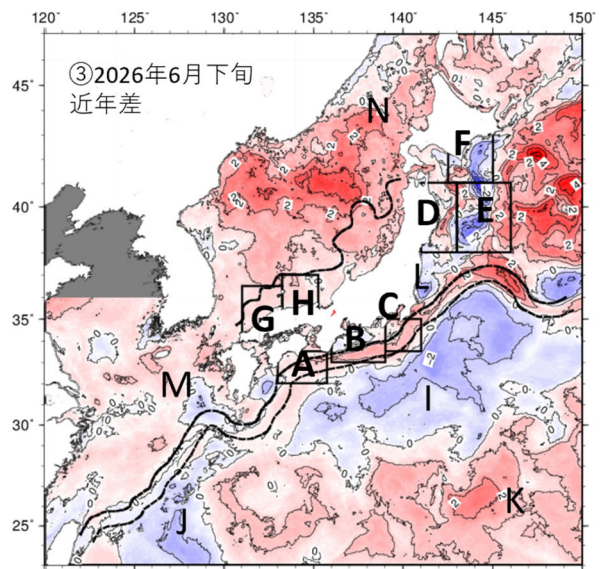
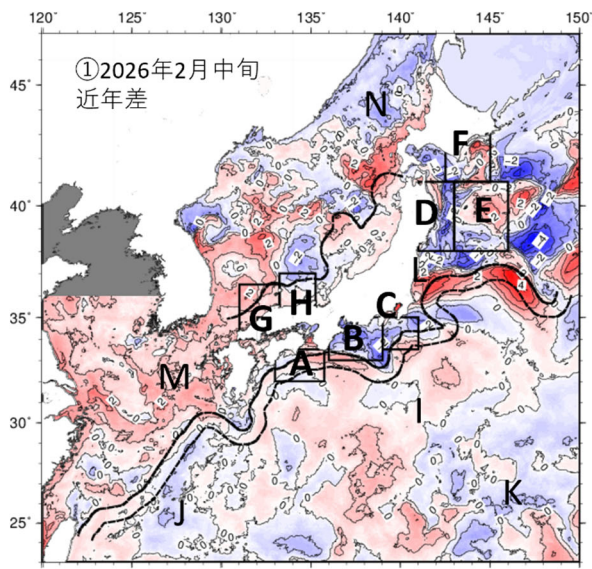


図 2.海面水温の近年(2011~2020)偏差と黒潮・対馬暖流流路 枠 A~H は各海域の範囲
出典: JAFIC

図 3.海面水温の前年偏差と黒潮・対馬暖流流路(点線は前年同期の流路)
出典: JAFIC

・道東海域の海面水温(図 2-F、図 4-F)は、1～3 月には暖水渦や暖水波及の影響もあったが、親潮系水が道東沿岸に停滞し、近年並～やや高めであった。4～6 月は暖水渦が消滅し、親潮系水の沿岸への停滞が続き、近年より低め～並みで推移した。

・鹿島灘～常磐南部の海面水温(図 2-L)は、冬季 1～5 月には、黒潮続流からの暖水波及や暖水渦の影響で、近年より高めであった。6 月は黒潮

続流からの暖水波及が終息し、近年より低めであった。

(3)日本海 対馬暖流

・対馬暖流の勢力は、1～3 月は平年よりかなり強めであった。4～6 月は、前半は平年より弱めの期間もみられたが、おおむね平年並～平年より強めであった。

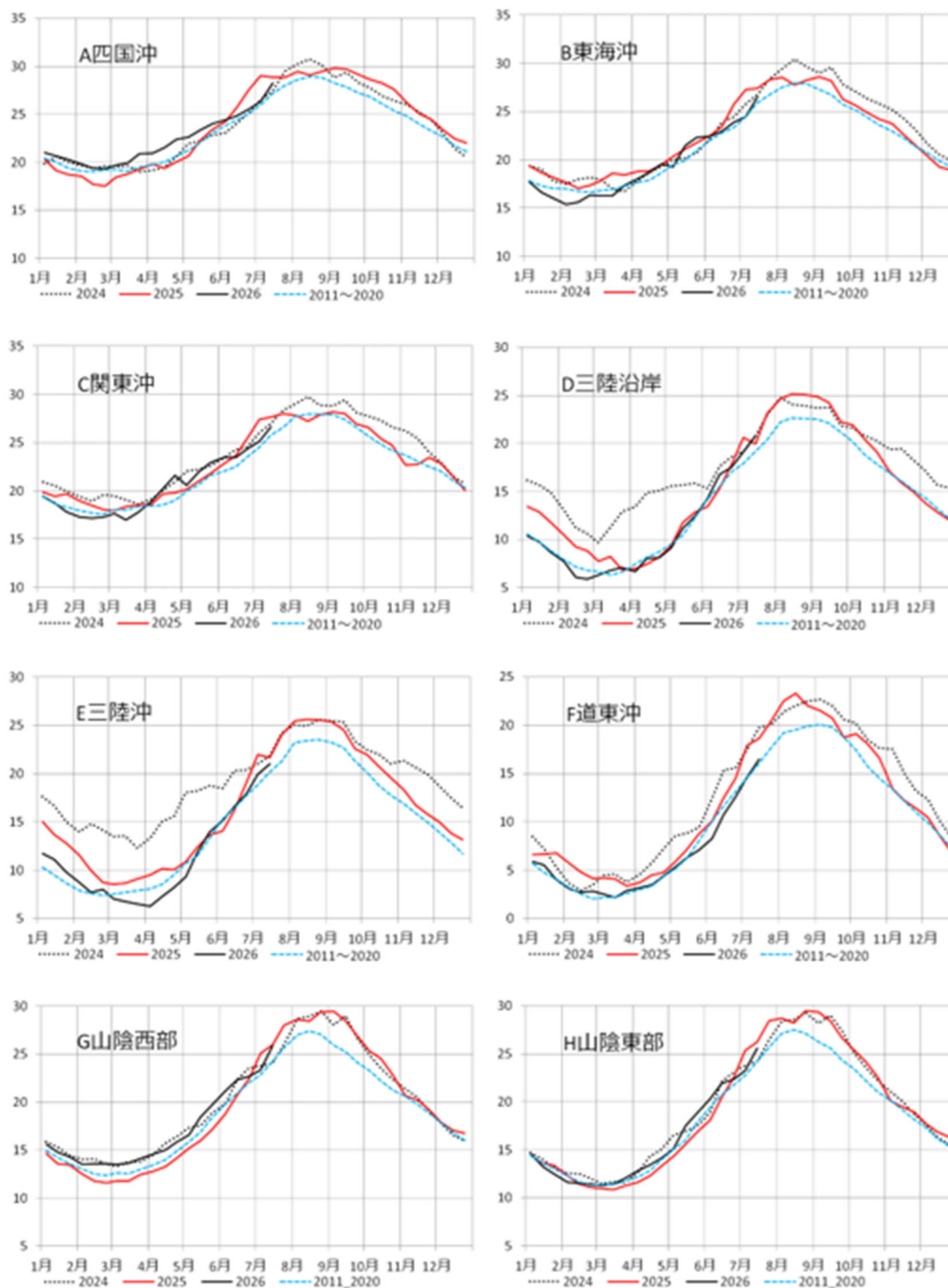


図 4.各海域の海面水温の推移(各海域は図 2 の枠に対応)出典:JAFIC

・流路(図 1)は、1～3 月は、山陰では西部で接岸し、東部は蛇行して南下し接岸することが多かった。北陸以北はおおむね離岸した。4～6 月は、山陰では変動が大きく、山陰東部蛇行が徐々に縮小して離岸した。北陸ではおおむね離岸したが、東北は接岸傾向であった。

海面水温

・山陰の 1～3 月の海面水温は、対馬暖流が離岸していた西部(図 2-G、図 4-G)では近年より高めであったが、東部(図 2-H、図 4-H)では対馬暖流蛇行部内側を中心に低めであった。4～6 月の山陰東部の海面水温は、対馬暖流の蛇行が収束し、近年より低めの海域は消滅した。

・北陸の海面水温は、一時的に近年より低めの時期もあったが、おおむね近年より高めであった。

・北部(図 2-N)の海面水温は、1～2 月には沿海州側を中心に近年より低めであったが、3 月以降は低めの海域は縮小し、近年より高めであった。

・東シナ海北部～九州西沖(図 2-M)の海面水温は、近年より高めで推移した。

(4)海面水温の前年差

黒潮域

・九州～四国沖の海面水温(図 3-A、図 4-A)は、前年より高めで推移した。一方、東海沖(図 3-B、図 4-B)や関東沖(図 3-C、図 4-C)は、1～3 月には C 型流路内側の冷水渦の影響で、前年より低めであったが、4 月以降は N 型流路に推移し、黒潮流軸が前年より接岸した影響で、高めであった。

・6 月は、梅雨前線が本州南方沖に前年より長期間停滞した影響で、沖縄周辺(図 3-J)、四国～東海～関東沖(図 3-A～C)の海面水温は前年より大幅に低めであった。

親潮域・混合水域

・三陸～道東海域(図 3-D～F、図 4-D～F)の海面水温は、1～4 月には親潮の面積が前年より大きく、前年と比べて低めであった。5 月以降は三陸(図 4-D～E)で暖水の影響が現れ、前年並で推移したが、道東海域(図 4-F)は暖水渦の影響があった前年に比べて低めで推移した。

日本海

・日本海の海面水温は、北部(図 3-N)では前年より低め、南部では高めで推移したが、山陰東部(図 3-H、図 4-H)は 1～2 月は前年より低めの期間もみられた。

(海洋事業部 矢野泰隆)

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

JAFIC 調査港における 2026 年 1～6 月の調査対象全魚種の累計水揚量は 61 万 5 千トンで、前年同期(84 万トン)の 73%(図 5)、過去 5 年平均(88 万 2 千トン)の 70%であった。平均価格は 326 円/kg で、前年同期(219 円/kg)の 149%、過去 5 年平均(205 円/kg)の 159%であった。なお、本報告の水揚量と価格は JAFIC「おさかなひろば」によるものであり、2026 年 1～6 月は速報値である。

主要 48 魚種の 2026 年 1～6 月の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年同期と比較した(表 1、図 6)。水揚量は、カタクチイワシ、ウルメイワシ、マダラなど 12 魚種が前年同期を上回り、さば類、ホッケ、冷凍キハダなど 9 魚種は前年同期並み(増減率 5%以下)、マイワシ、スケトウダラ、マアジなど 27 魚種は前年同期を下回った。平均価格は、マイワシ、さば類、生鮮スルメイカなど 27 魚種が前年同期を上回り、ブリ、ヤリイカ、クロマグロなど 11 魚種が前年同期並み、生鮮カツオ、ギンザケ(養殖)、冷凍スルメイカなど 10 魚種が前年同期を下回った。

このように、2026 年 1～6 月は、主要魚種について価格と水揚量の関係を前年同期と比較すると、水揚量が減少し、価格が上昇した魚種が多く見られた。全魚種の合計水揚量は前年同期から約 23 万トン減少しており、この減少には、マイワシの水揚量が前年同期から約 19 万トン減少したことが大きく影響したとみられる。また、さば類では国産魚への引き合いの強まり、いわし類では養殖向け餌料需要の増加などを背景に高値傾向が継続した。一方、生鮮カツオのように水揚量増加に伴い価格が下落した魚種もみられた。全体としては、マイワシの水揚量減少などを背景に水揚量が大きく減少する一方、価格は高水準で推移した。

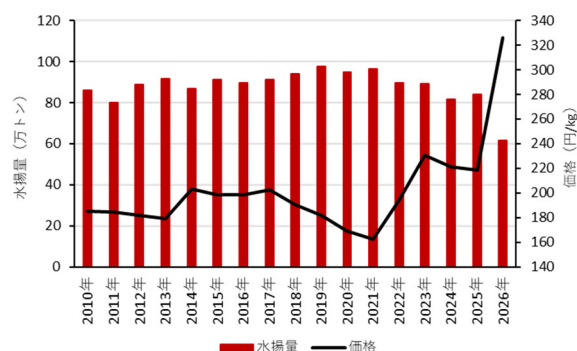


図 5. JAFIC 調査港の 1～6 月累計水揚量と平均価格の推移

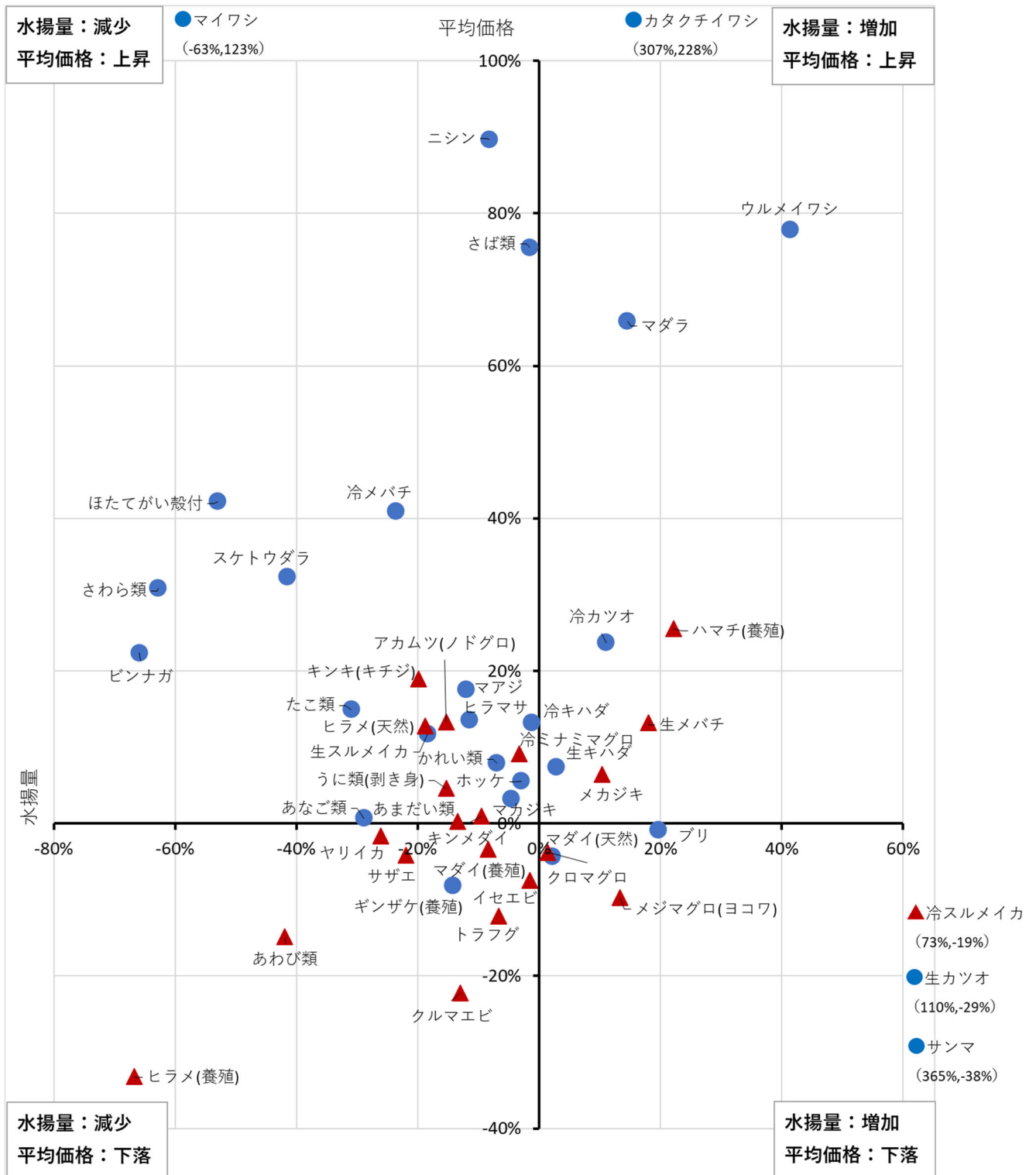


図 6. 主要 48 魚種の水揚量と平均価格の比較(2026 年 1~6 月/2025 年 1~6 月)。横軸と縦軸の目盛に記載した%は、前年同期比の増減率を示す。▲は 2025 年 1~12 月の平均価格が 1,000 円/kg 以上、●はそれ未満の魚種を示す。目盛の範囲外にある魚種については、水揚量と価格の増減率をカッコ内に示す。

表 1. JAFIC 調査港の 2026 年 1～6 月の魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較。なお、魚種は 2025 年 1～12 月の平均価格の昇順に並べ、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。

	1～6月						1～12月
	2026年		2025年		前年比		2025年
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格	価格
カタクチイワシ	15,446	138	3,794	42	407%	328%	41
マイワシ	117,428	115	315,623	52	37%	223%	51
スケトウダラ	36,512	81	62,466	62	58%	132%	62
ウルメイワシ	11,218	130	7,935	73	141%	178%	71
ニシン	3,273	156	3,566	82	92%	190%	95
さば類	123,721	202	125,658	115	98%	176%	152
ホッケ	4,047	225	4,168	213	97%	106%	263
マアジ	27,657	303	31,429	258	88%	118%	264
かれい類	6,570	279	7,060	259	93%	108%	271
冷カツオ	78,620	325	70,769	263	111%	124%	272
マダラ	23,645	370	20,635	223	115%	166%	286
ほたてがい殻付	9,055	459	19,249	323	47%	142%	316
サンマ	4	353	1	573	465%	62%	337
ブリ	12,686	406	10,599	410	120%	99%	389
冷キハダ	13,070	497	13,221	439	99%	113%	434
ビンナガ	6,168	524	18,087	429	34%	122%	448
生カツオ	17,131	442	8,164	625	210%	71%	559
マダイ(天然)	1,872	697	1,832	729	102%	96%	703
生スルメイカ	1,974	804	2,418	719	82%	112%	727
マカジキ	255	819	267	793	95%	103%	746
生キハダ	5,336	902	5,188	839	103%	107%	822
さわら類	493	1,141	1,323	872	37%	131%	837
ヒラマサ	375	995	423	876	89%	114%	903
ギンザケ(養殖)	5,695	847	6,636	922	86%	92%	907
冷メバチ	8,070	1,215	10,567	862	76%	141%	927
あなご類	205	979	288	973	71%	101%	972
たこ類	1,816	906	2,630	788	69%	115%	984
ヒラメ(天然)	885	1,067	1,090	946	81%	113%	1,000
ヤリイカ	649	1,094	878	1,113	74%	98%	1,007
マダイ(養殖)	79	1,082	87	1,120	92%	97%	1,107
メジマグロ(ヨコワ)	295	1,129	260	1,250	113%	90%	1,149
サザエ	67	1,138	86	1,187	78%	96%	1,161
生メバチ	1,509	1,279	1,278	1,129	118%	113%	1,230
冷スルメイカ	327	1,582	189	1,946	173%	81%	1,238
メカジキ	1,093	1,434	990	1,347	110%	106%	1,328
ハマチ(養殖)	812	1,761	664	1,403	122%	126%	1,435
キンメダイ	897	1,840	992	1,822	90%	101%	1,815
冷ミナミマグロ	2,585	2,170	2,672	1,988	97%	109%	1,868
ヒラメ(養殖)	2	1,562	6	2,337	33%	67%	2,287
クロマグロ	2,974	2,516	2,932	2,614	101%	96%	2,509
キンキ(キチジ)	497	2,548	620	2,141	80%	119%	2,563
アカムツ(ノドグロ)	114	3,062	134	2,701	85%	113%	2,887
あまだい類	79	3,412	91	3,402	87%	100%	3,262
トラフグ	93	3,786	100	4,310	93%	88%	4,056
クルマエビ	4	4,476	5	5,757	87%	78%	5,083
イセエビ	47	6,347	47	6,861	99%	93%	6,127
あわび類	8	8,409	14	9,874	58%	85%	8,863
うに類(剥き身)	30	12,220	35	11,680	85%	105%	10,297

(水産情報部 石山なな子)

主要魚種の需給関係の予備的検討

主要魚種について、全国水揚量（年計）と平均価格の関係を 2021～2026 年について図 7 にまとめた。なお、2026 年は上半期の値であるため、注意が必要である。

この期間でみると、いずれの魚種でも水揚量の多寡と価格の高低の間には負の関係がみられ、需給関係を表していると考えられる。ただし、多くの魚種（特にマイワシ、カツオ、スルメイカ）では 2026 年に盛漁期の値が含まれていないため、下半期のデータを待って再度検討したい。

水揚量と価格について最高値/最低値を計算し、その関係を魚種横断的に図 7 の右下に示した。生鮮マイワシとカツオ釣りを除いて、両者には正の関係が見られた。すなわち、水揚量変動が大きければ、価格変動が大きかった。生鮮マイワシとカツオ釣りは水揚量の変化に対して価格の変化が他魚種より大きい傾向にあった。この原因として、マイワシでは国内の需給関係に加えて、世界的な魚粉価格がマイワシ価格に影響していると考えられる。一方、生鮮カツオ（釣り）については、まき網による生鮮カツオの変動の影響を受けた可能性がある。

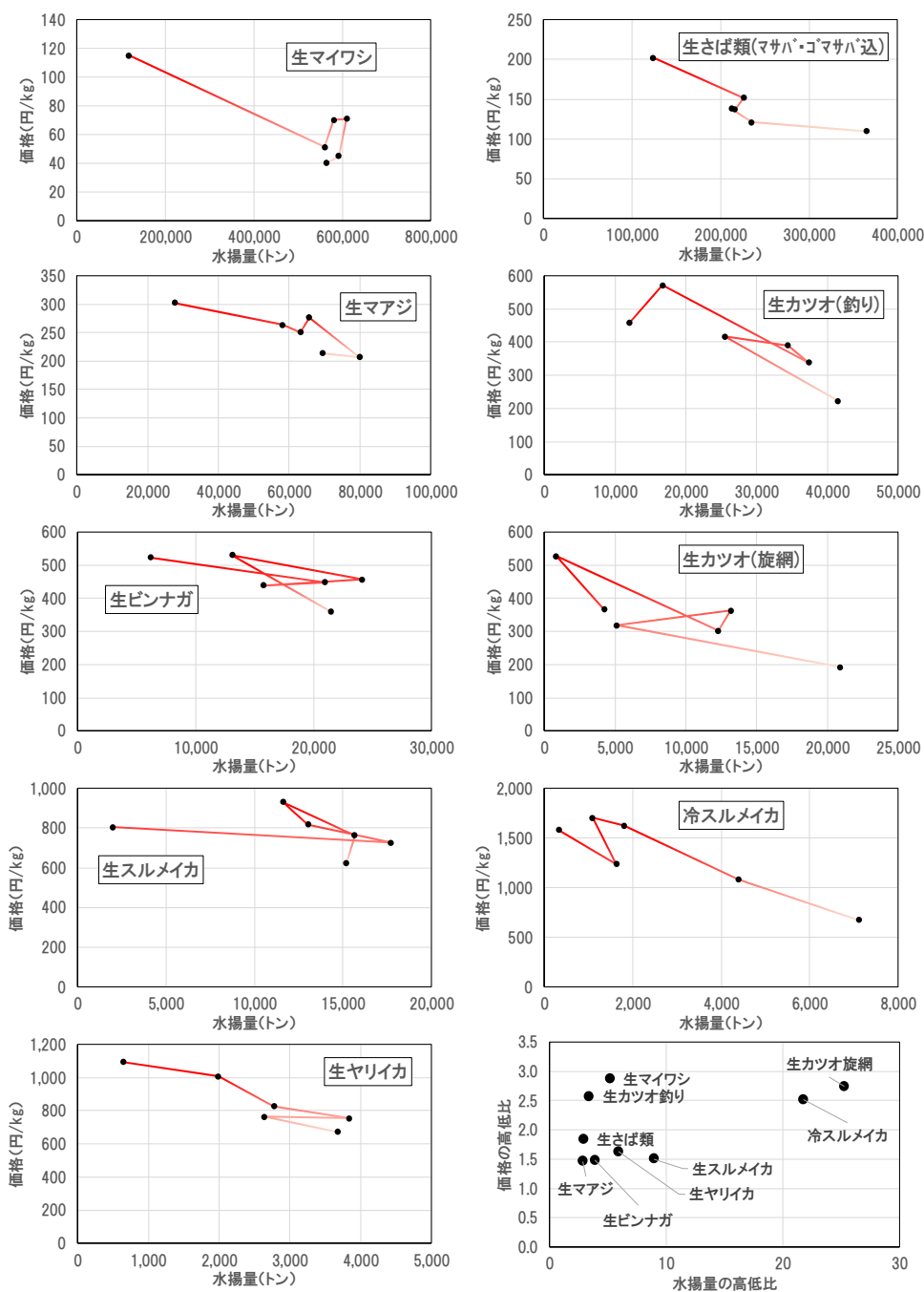


図 7. 2021～2026 年における主要魚種の全国水揚量と平均価格との関係

2026 年は上半期の値 直近年ほど線の色が濃い

データ: JAFIC おさかなひろば

(水産情報部 谷津明彦)

3. 魚種別の漁海況・市況

(1) マイワシ・さば類・マアジ

● マイワシ

マイワシの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 11.7 万トン(太平洋側 2.5 万トン、東シナ海・日本海側 9.2 万トン)で、前年同期(31.6 万トン)を約 20 万トン下回った(図 8)。

銚子港での 1～6 月の水揚量は 1.6 万トンで、前年を約 12.8 万トン下回った。その主な原因として、前年秋からの南下群の来遊が少なかったことが挙げられる。一艘まき網の水揚げ物は体長 15～17cm(2～3 歳魚)が主体、定置網では 15～18cm(2 歳魚以上)が主体であった。犬吠埼周辺の漁獲物は例年より体長が小さく、その要因として餌環境の悪化や高水温による代謝の増加などが考えられる。例年 6 月に操業が開始される道東沖では、まき網漁業の操業は未だなく、棒受網漁業でもマイワシは漁獲されなかった。

日本海側では 2～5 月に隠岐海峡周辺での漁獲が好調で、境港の 1～6 月の水揚量は 5.6 万トンで、前年の 4.8 万トンを上回った。隠岐海峡の水揚げ物は体長 15～18cm(1 歳魚以上)が主体であった。

価格は過去 4 年を上回った(図 9)。その要因として、例年主体となる太平洋側での著しい不漁や世界的な魚粉価格の高騰が挙げられる。

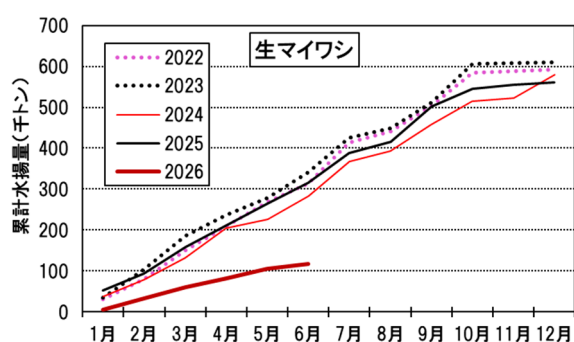


図 8. 2022～2026 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別累計水揚量の推移

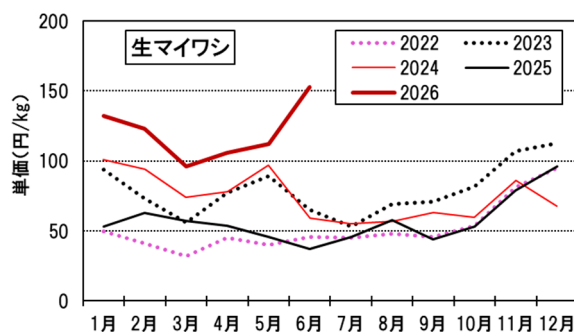


図 9. 2022～2026 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 11.8 万トン(太平洋側 1.9 万トン、東シナ海・日本海側 9.9 万トン)で、前年同期(12.0 万トン)並みであった(図 10)。

太平洋側では 2022 年からの不漁が続いており、5～6 月に銚子港で過去 4 年を上回る水揚げがあったものの、体長(尾叉長)30cm 未満の小型が主体であった。

東シナ海・日本海側では、遠洋まき網により 1～3 月に主に対馬周辺で漁獲され、4 月以降はマアジと混獲された。山陰～対馬沖ではまとまった漁獲が継続したものの 1～6 月の松浦港と境港の水揚量は前年をやや下回った。対馬周辺の水揚げ物は 1 月には 25～35cm(1～2 歳魚以上)主体であったが、2 月には 2 歳魚以上が減少し、3 月以降は 24～29cm(1 歳魚)主体となった。隠岐海峡での 1～6 月の水揚げ物は 25～31cm(1 歳魚)主体であった。

価格は前年 9 月以降上昇し、1～6 月は過去 5 年で最高であった(図 11)。その要因として、マイワシ同様に国内の供給量の減少に加えて、ノルウェーなど北東大西洋のタイセイヨウサバの漁獲枠が削減されたことなど国際的なさば類供給量の減少も挙げられる。

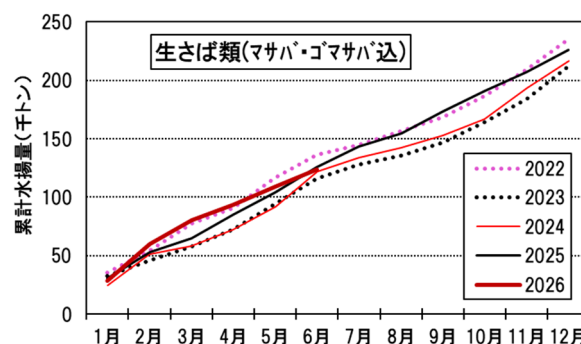


図 10. 2022～2026 年の全国主要港における生鮮さば類の月別累計水揚量の推移

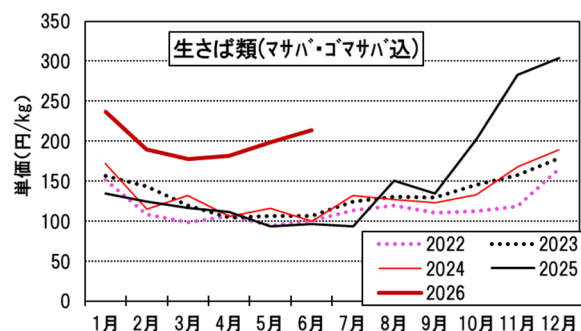


図 11. 2022～2026 年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

● マアジ

マアジの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 2.8 万トン(太平洋側 0.3 万トン、東シナ海・日本海側 2.5 万トン)で、前年同期(3.1 万トン)並みであった(図 12)。日本海側では山陰沖での漁獲が続き、境港における 1~6 月の水揚量は前年を上回った。東シナ海側では、遠洋まき網で 4~5 月に対馬海域でマサバに混じってまとまった漁獲がみられ、3~6 月に東シナ海中南部でもまとまって漁獲されたものの、1~6 月の東シナ海側の水揚量は前年を下回った。対馬周辺の水揚物は 1~2 月には体長(尾叉長)20~25cm(1 歳魚)主体であったが、3 月以降は 15~19cm の 1 歳魚が混じりはじめ、月を追うごとにその割合は増加した。

価格は 3~4 月は前年を下回ったものの、他の月は上回った(図 13)。

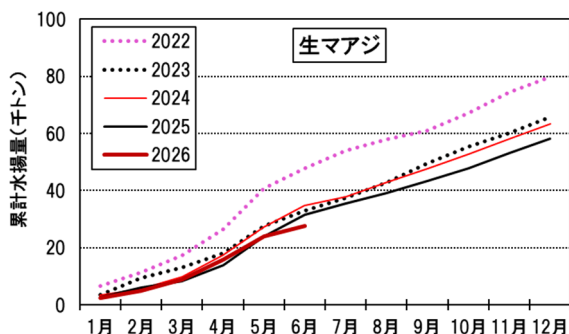


図 12. 2022~2026 年の全国主要港における生鮮マアジの月別累計水揚量の推移

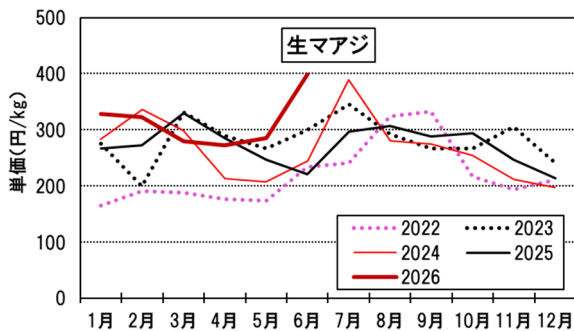


図 13. 2022~2026 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

(水産情報部 源 浩輔)

(2) カツオ・ビンナガ

● カツオ

1~6 月の全国の釣りによる生鮮カツオの水揚量は約 1.2 万トンで、過去 4 年平均(約 1.1 万トン)を上回った(図 14)。中型竿釣り船の漁期は例年どおり 2 月上旬ごろからスタートしたが、硫黄島周辺の漁場では群れが薄く、4 月までは例年どおり南西諸島が主漁場となった(図 15)。5 月は漁場が徐々に東に移動し、東海地方沖や伊豆諸島南

方などが漁場となった。6 月の漁場は常磐~東北沖まで急速に北上した。

各地の水揚状況から、5~6 月は伊豆諸島南方では 1.5~2kg 前半のカツオが分布し、常磐~東北沖では 2~3kg のカツオが分布していたとみられる。漁場とサイズがそれぞれ異なることから、生まれや回遊ルートが異なる群れが日本近海に来遊していると考えられる。

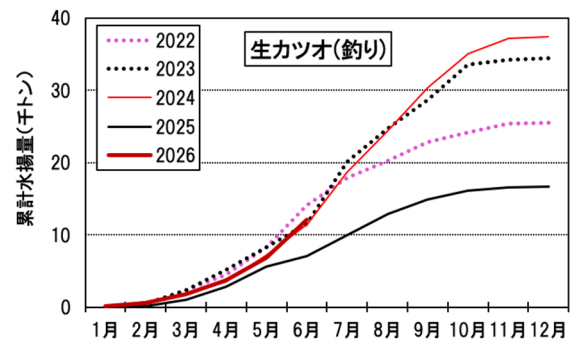


図 14. 2022~2026 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣り)の月別累計水揚量の推移

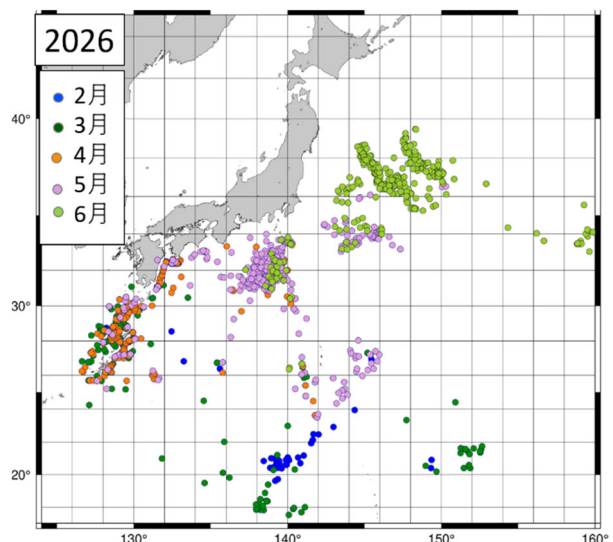


図 15. 2026 年 2~6 月の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体) ※1 月の漁場情報は無し

このように、前年の東北沖の不漁とは異なり、本年はカツオが日本近海に順調に来遊していると考えられる。JAFIC の 5 月時点での予報は、「主要港である気仙沼港への漁期全体の水揚量は前年を上回り過去 5 年平均を下回る」であった。現在来遊している小型のカツオが引き続き摂餌回遊を行い、秋季に戻り鰹となるまで東北海域で漁獲されると見込まれるため、好漁が継続し、予報を上回る可能性が高い。水産資源研究所の 1 日 1 隻当たり漁獲量の予報は「過去 10 年の平均並みの水準」とのことだが

(<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press>)

/pr2026/files/20260629_katsuo.pdf)、これも上回る可能性がある。

1～6月の全国月平均価格は390～571円/kgで、前年より安い、近年ではやや高値で推移した(図16)。

まき網による生鮮カツオの水揚量は5月まで低調だったが、6月に急増し、1～6月の合計水揚量は4,235トン、過去4年平均(約2,900トン)の148%で、好調に転じた(図17)。

全国月平均価格は、5月に604円/kgに上昇し、近年の主漁期では最高値水準となったが、6月の好漁で340円/kgに落ち着いた(図18)。

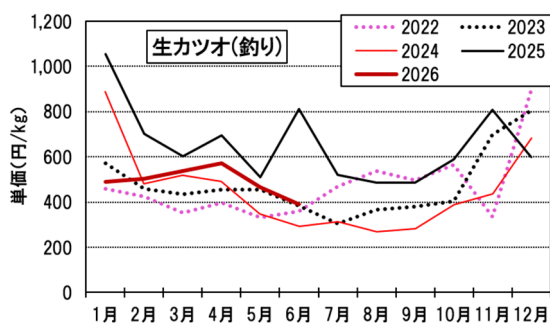


図16. 2022～2026年の全国主要港における生鮮カツオ(釣り)の月別単価の推移

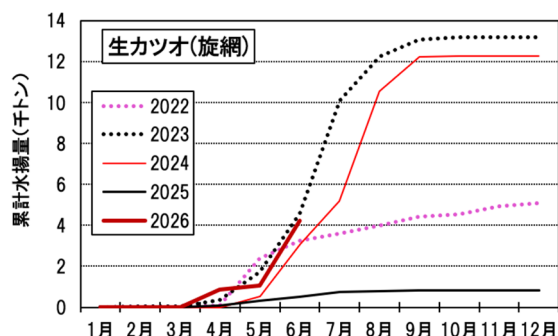


図17. 2022～2026年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

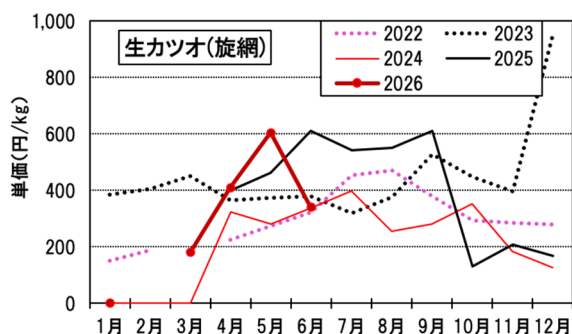


図18. 2022～2026年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

● ビンナガ

1～6月の全国の生鮮ビンナガの水揚量は6,168トンで、過去4年平均(約1.5万トン)の41%

で、近年では最も低調だった(図19)。生鮮ビンナガの水揚の主体となる中型竿釣り船による漁獲は、6月下旬までビンナガの群れに遭遇しなかったことから、カツオ主体の操業が続いていた。6月末に東北はるか東沖でビンナガのまとまった群れが見つかり、例年より遅いビンナガ漁の開始となった。

1～6月の全国平均価格は481～647円/kgで、近年では高値で推移した(図20)。

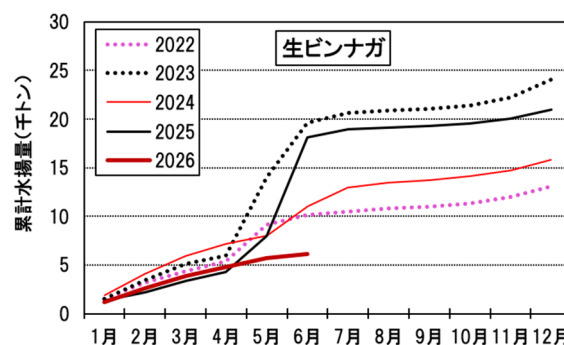


図19. 2022～2026年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

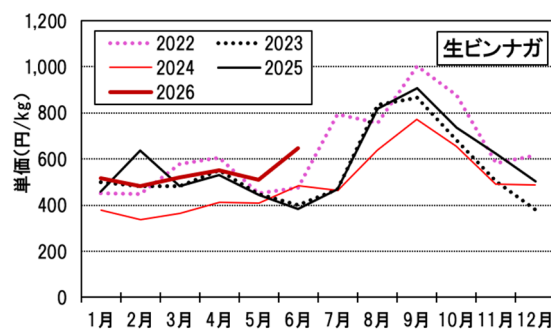


図20. 2022～2026年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

(水産情報部 水野紫津葉)

(3)スルメイカ・アカイカ

● スルメイカ

生鮮スルメイカの全国主要港における1～6月の累計水揚量は2.0千トンで、前年同期(2.4千トン)の82%、2022～2025年平均(2.5千トン)の80%であった。(図21)。この理由として、資源変動に加えて、主に以下のような採捕禁止令や操業自粛が考えられる。すなわち、大臣管理区分の小型いか釣り漁業(10～30トン未満)では、11月に2,377トンのTAC超過が判明したため、11～3月は、スルメイカの採捕が禁止された。また、沖合底曳網漁業はTAC消化率が上限に達したことから、1～3月は休漁した。

生鮮スルメイカの価格は、1月には北海道の小型いか釣りの試験操業の水揚が続き、過去5年で

最高価格となった。2～4月は常磐の小型底曳網、5～6月は三重県の中型まき網と金沢港の小型いか釣りの水揚げが主体となったが、サイズも小型であったため、価格は低下した(図 22)。すなわち、常磐の小型底曳網や三重県の中型まき網の漁獲物は主に 30～70g、金沢港でも主に 100g 以下であった。

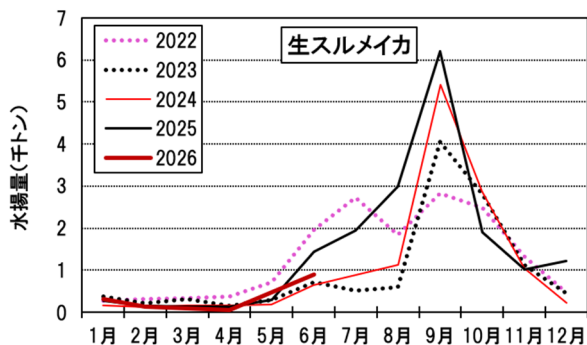


図 21. 2022～2026 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別水揚げ量の推移

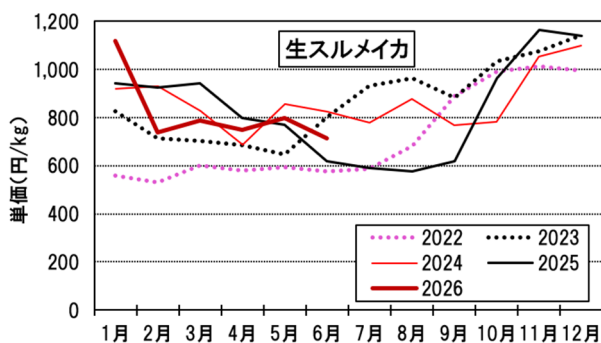


図 22. 2022～2026 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

日本海に分布する秋季発生系群は、九州西岸～山陰沖で秋季に産卵し、例年 5～6 月に日本海を北上しながら成長し、山陰～北陸で小型いか釣り船の漁獲対象となる。本年 1～6 月の日本海の海面水温は平年より 2～4℃高めに推移したが、若狭湾沖では 1～2℃低く、この低水温海域の縁辺部に漁場が形成された。しかし、群は全般に薄く、6 月になっても佐渡以北の水揚げは少なかった。この時期に日本海の小型いか釣りの水揚げの主体となる金沢港の 1～6 月の累計水揚げ量は 669 トンで、前年並み(638 トン)だった(図 23)。また、前年同様に 6 月がピークで、2022 年や 2024 年より早かった。

太平洋側主要港における 1～6 月の累計水揚げ量は 0.9 千トンで、前年同期(1.1 千トン)の 79%、2022～2025 年平均(0.8 千トン)の 117%であった(図 24)。2025 年の好漁の原因は、2025 年春の黒

潮大蛇行の終息などに伴い三陸・常磐で高水温が解消されたこと、九州西岸で発生した稚イカが太平洋側に多く輸送されたこととされる。

2026 年は水温低下によりスルメイカの北上が、前年より遅かったと思われる。すなわち、紀伊半島東岸や常磐沿岸で 5～6 月に好漁となり、1～6 月の水揚げ量は銚子港で 248 トン(前年比 1033%)と好調だったが、石巻港は 397 トン(前年比 53%)、八戸港は 58 トン(前年比 42%)と低調であった。また、岩手県～道東の小型いか釣りは 6 月には操業されなかった。

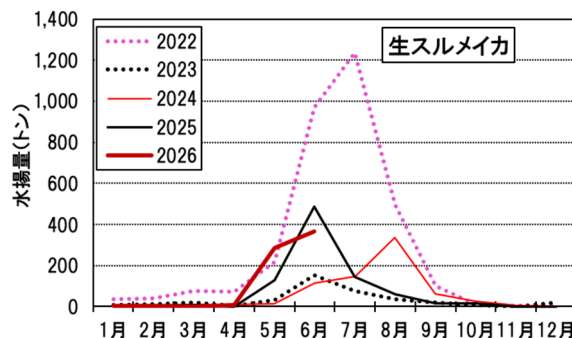


図 23. 2022～2026 年の金沢港における生鮮スルメイカの月別水揚げ量の推移

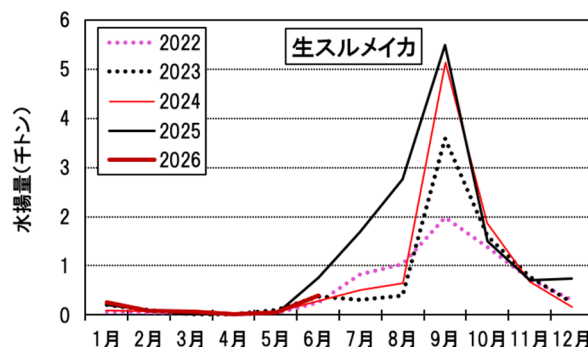


図 24. 2022～2026 年の太平洋側主要港における生鮮スルメイカの月別水揚げ量の推移

中型いか釣り船(冷凍)は1月には三陸近海のアカイカ冬季漁の探索に出たが、漁獲は皆無であった。また、16 隻が 1～2 月に山陰～対馬東沖で操業したものの、1 日 1 隻当たり 100kg 前後の低調な漁況であった。5 月に入り、中型いか釣り船は休漁期間を明けて、全船が太平洋公海域のアカイカ漁に出漁した。

1～6 月の冷凍スルメイカの水揚げ量は 327 トンで、前年(189 トン)の 173%、2022～2025 年の平均並み(328 トン)であった(図 25)。5～6 月は中型いか釣りの水揚げがなく、船凍設備を持った小型いか釣りなどが少量を水揚げした。冷凍スルメイカの価格は、水揚げが少ないことから、高水準で推移した(図 26)。

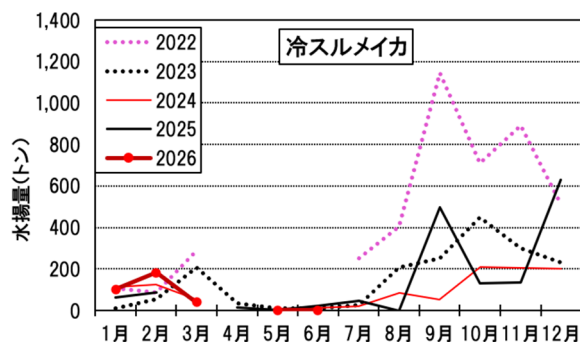


図 25. 2022～2026 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別水揚量の推移

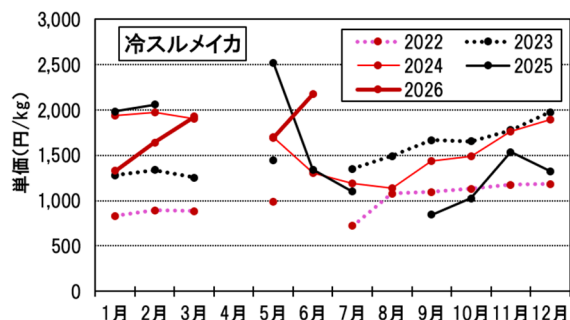


図 26. 2022～2026 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移

(水産情報部 緑川聡)

● アカイカ(ムラサキイカ)

5 月中旬から、中型いか釣り船 28 隻、大型いか釣り船 1 隻、サンマ棒受網船を改修したいか釣り兼業船 1 隻、計 30 隻が北太平洋西経海域を主体にアカイカ操業(夏漁)を開始した(図 27)。日本海でのスルメイカ漁の不振を受け、今期からは中型以上のいか釣り船全船がアカイカ操業を実施するようになった。7 月現在も兼業船を除いて操業を継続している。

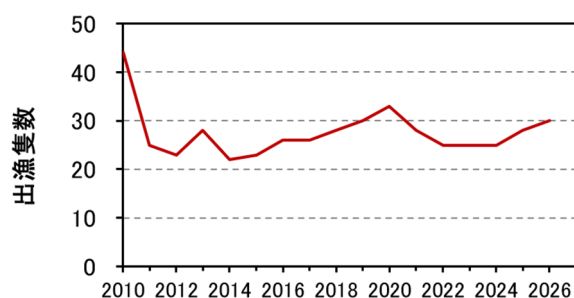


図 27. アカイカ夏漁の出漁隻数(大型いか釣り船 1 隻、兼業船 1 隻を含む)の推移

アカイカ夏漁 1 航海目の資源水準は、海洋環境指数のひとつである北太平洋環流振動(North Pacific Gyre Oscillation: NPGO)の前年 12 月の値

に関係がある(図 28)。この関係を用いて 2026 年度の 1 日・1 隻当たりのアカイカ胴肉平均漁獲ケースは、102～136 ケースと予測し、4 月 23 日に青森県八戸市にて実施された水産関係者との意見交換会「令和 8 年度いか釣り船漁期前情報」にて報告した。7 月 20 日までに協力船 11 隻から報告を受けたアカイカ胴肉平均漁獲ケース数は約 123 ケースであり、予測どおりの結果となっている。

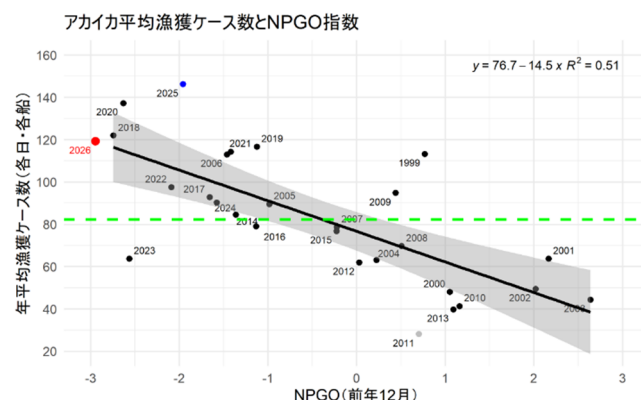


図 28. 1999 年～2026 年におけるアカイカ平均漁獲ケース数と NPGO 指数の関係(2026 年は予測値)

(海洋事業部 大瀧敬由)

4. トピックス

マイワシの 2026 年の好不漁と資源変動の関係

2026 年上半年期でみると、マイワシ対馬暖流系群（日本海・東シナ海）は好漁だが、太平洋系群で不漁となった（本文参照）。この現象は水産業界のみならずマスコミでも注目されていることから、現時点で考えられる要因をまとめた。

近年の資源量が対馬暖流系群では増加傾向であるのに対し、太平洋系群では減少傾向にあることが基本的な原因と考えられるが、太平洋からの移動の可能性も指摘されている。この移動だけで両系群の好不漁を説明できるかは今後の課題であるが、ここでは資源量の動向について検討する。

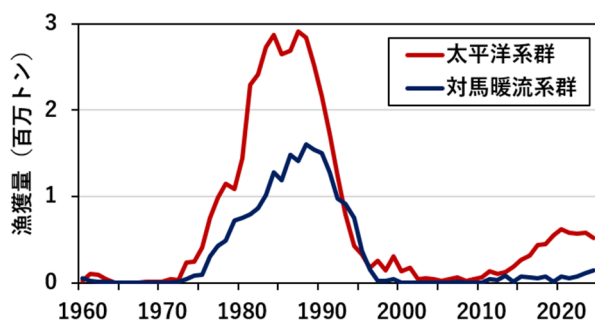


図 29. 1960～2024 年の日本のマイワシ漁獲量の推移(系群別) データ出典: 令和 7 年度資源評価など

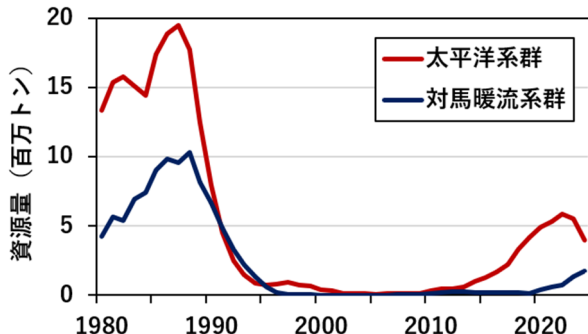


図 30. 1980～2024 年の日本のマイワシ資源量の推移(系群別) データ出典: 令和 7 年度資源評価

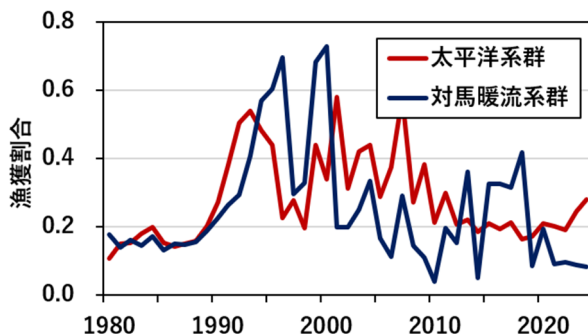


図 31. 1980～2024 年の日本のマイワシの漁獲割合(漁獲量/資源量)の推移(系群別) データ出典: 令和 7 年度資源評価

過去を振り返ると、漁獲量や資源量変動は両系群でほぼ同期してきたが、太平洋系群が数年先行していた（図 29、30）。水産資源の変動は、一般に主に過剰漁獲（乱獲）と海洋環境の影響を受ける。

漁獲の影響は漁獲割合（漁獲量/資源量）により表すことができる（図 31）。太平洋系群の漁獲割合は 1980 年代には 20% 以下であったが、1990～2009 年は 30% を超えた年が多く、2010 年以降は 20% 前後で推移し、2023 年以降はやや高くなった。対馬暖流系群の漁獲割合は 1980 年代には 20% 未満であったが、その後は年による変動が著しくなり、1990 年代後半は 40% を超えた年が多く、2000 年代は低く、2010 年代はやや高く、2018 年からは 10% 未満で推移している。なお、太平洋系群は、近年は日本・ロシア・中国により漁獲されているが、国際的な資源管理の枠組みはない。対馬暖流系群は日本と韓国により漁獲される。

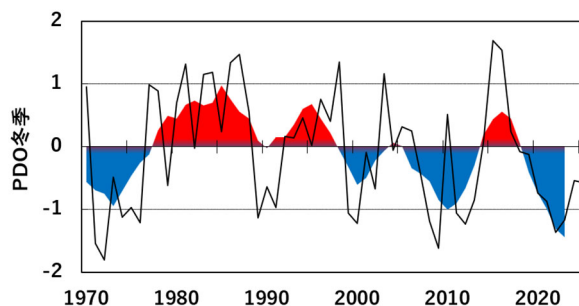


図 32. 1970～2025 年の太平洋十年規模指数の推移(実線は年値、塗りつぶしは 5 年移動平均) データ出典: 気象庁

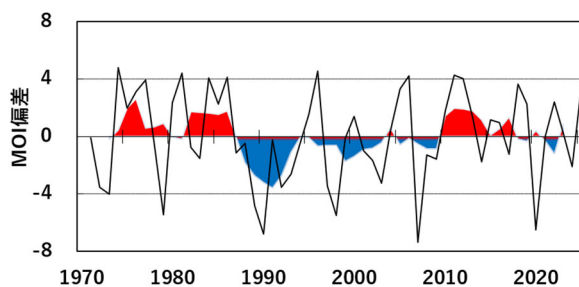


図 33. 1970～2025 年のモンスーン指数の推移(実線は年値、塗りつぶしは 5 年移動平均) データ出典: 気象庁

マイワシの資源変動は、アリューシャン低気圧の強弱などを主因とする太平洋十年規模変動指数(PDO、図 32)と関連が深いとされ、低気圧が強く、日本近海で北寄りの風が強く低温な時代(図 32 の赤色)がマイワシに好適とされる。しかし、1990 年代は PDO が好適であったにもかかわらず、マイワシ太平洋系群の資源量は低迷し、その原因

は高い漁獲割合にあったと考えられている。一方、1989～1991 年は PDO が負偏差となり、マイワシの加入量が激減した時期にほぼ相当した。この加入量減少期には漁獲割合は低く(図 32)、環境の急変による加入の失敗というのが定説である。なお、対馬暖流系群の再生産に影響が大きいとされるモンスーン指数(根室とイルクーツクの気圧差、図 33)は 1987～2009 年は負偏差で、対馬暖流系群マイワシにとって不適な時代が続いたと考えられる。

モンスーン指数は 2010 年から、PDO は 2015 年からマイワシに好適な環境となったが、その後不適な環境に転じた。しかしながら、両系群とも 2020 年代はマイワシが増加したため、低い漁獲割合が主な原因と考えられる。また、PDO は 2020 年代前半に負偏差に転じたのに対し、モンスーン指数は 5 年移動平均では平年並みであった。一方、2025 年の漁獲割合が太平洋系群で高く、対馬暖流系群では低かった。このような漁獲と環境の影響が 2026 年の好不漁の一因である可能性がある。

このように、マイワシの資源変動は海洋環境あるいは漁獲割合だけでは説明ができず、両者の重層的な影響に加えて、魚種間の競争や捕食など生態系の影響も受ける可能性がある。

最後に餌環境について検討する。マイワシはカイアシ類など動物プランクトンと珪藻など植物プランクトンを餌とする。植物プランクトンは動物プランクトンの餌であり、特に沖合や外洋域の基礎生産を主に担う。この基礎生産は、水温や栄養塩(リンや窒素などのうち海水に溶けて植物プランクトンが利用できるもの)に依存する。日本近海の水温は過去 100 年間にわたり、ほぼ全域で上昇してきたが、特に 2015 年頃から顕著となった(気象庁)。水温上昇により、温帯域の沖合や外洋域では中層からの栄養塩供給が減少することが懸念されている。また、水温上昇により植物プランクトンの春の増殖の時期も変化し、マイワシ稚仔魚と餌生物との出会いにも影響する可能性もある。

マイワシの成長と成熟は、資源量が多いと遅れる傾向が 1980 年代前後に両系群で見られた。これは、1 個体あたりの餌生物量が減少する密度効果により説明できる。2010 年代以降、太平洋系群では資源増加に伴い成長・成熟が遅くなったが、1980 年代前後より資源量が少ないにもかかわらず、強い密度効果が見られている。この原因として、餌環境が近年は悪化したのではないかという論文が出されている。また、高水温によりマイワシの代謝が増加すれば、成長・成熟に向けられるエネルギーが少なくなる。一方、対馬暖流系群では近年は成長・成熟に顕著な変化はみられていない。

従って、近年の水温上昇の下で、マイワシの成長・成熟の遅れは太平洋系群のみで見られたが、この海域差については今後の大きな課題である。

以上をまとめると、海洋環境は太平洋系群のほうに対馬暖流系群よりも不適と考えられ、漁獲割合も太平洋系群のほうが高く、これらは近年の両系群の資源動向に一致している。一方、過去に見られた資源量変動が太平洋系群で数年先行した現象については、その原因は明らかではない。また、PDO の性質については、近年頻発する海洋熱波などの影響により変化しているという説もある。今夏に行われる資源評価に加え、海洋環境や漁獲の動向を注視したい。

(水産情報部 谷津明彦)